

# 昔の火事

宮本百合子

青空文庫



こちとらは、タオルがスフになつたばかりでもうだつがあがらないが、この頃儲けている奴は、まつたく思いもかけないようなところで儲けてるんだねえ。理髪屋の親方の碌三がそう云い出した。中学校や女学校の試験が新考査法になつて、いつとう儲けたのは誰だと思うね。頭をいじられている猛之介は、白い布をぐるりとかぶせられて目をつぶりながら、曖昧にゆるい入れ歯をかみ直して、ふうむと云つた。いつとう儲けたなア歯医者だそうだぜ。齶歯<sup>むしば</sup>一本について一点ずつひくんだそうだ。だもん、どこの親でも躍起となるね。何かでチヨイチヨイと埋めてさえありや引かないんだそうだから、歯医者は繁昌して、夜まで子供で一杯だつたとさ。大分儲けたそうな話だ。これから毎年となりや、一身上は忽ちだ。胡麻塩の頸筋のところを茹らされている窮屈そうな声で猛之介は、まあ、それもよからうさとゆつくり云つた。日本人の歯がみんな丈夫になつていいいかもしんねえ。それから大分間をおいて、猛之介は、いかにもこの日ごろ考へてゐるらしい口調でこう云つた。だがまあ、かね金なんというもなあ、儲けさしてくれるんか分んねえようなところもあるもんだ。時世時世で、金があつちからころがりこんで来るつてこともあるもんで、その道に居合わせた者は、運がいいというだけさ。——遠慮して素通りさせるがものはねえ。理髪屋

の碌三は、鉄を鳴らしながら後つきの工合を眺めていたのだが、成程ねえ、と感服したようにはうに唸つて、やがて、ハツハツハと苦っぽい笑いかたをした。理窟はそれつくもんだ。

碌三も猛之介も、近頃新市街に編入されたばかりのこの土地では生えぬきで、若衆仲間からのつき合いであった。土地もちの連中があつまつて、村から町になつたとき、土地整理組合のようなものをつくつた。新市街に編入されたというのも、近年こつち方面へ著しく工業が発展して來たからで、麦畠のあつちこつちに高い煙突が建つた。大東京の都市計画で、この方面一帯が何年か後には一大工業中心地になるという話がある。土地整理組合というのもこの見どおしに立つて、土地もちが会社やそのほか土地を買おうとするのに不当な懸引をされないよう、その反面には地主の間に利益の均等を守ろうというわけでつくられたのであつた。

碌三も祖先代々の麦畠をもつて、猛之介も祖父さま譲りの土地をもつて、組合が出来るときから入つている。猛之介の土地は、つい近頃一町歩まとめて或る会社に売れた。事変以来地価はあがるばかりだが、特にこの半年ほどは、秤の片つ方へ何がどつさりと載つたのか、価はピンピンとつりあがつて、組合での地価も、初めの頃から見れば三倍ほどにはあがつた。その価で一町歩売ったのが猛之介である。

碌三の地面は二町歩ほどであるが、割がわるいところにあつた。土地が小さくいくつにかわかれで散在している上に、小さい沢に向つて、この頃は乙女椿などが優しく咲いている藪になつたところもある。大体が、道路から奥へ入りすぎていた。だから、土地と一緒に必ず道路を問題にする会社関係は、この奥へは手を出さない。坦々たる広い改正道路が新しく出来て、その左右には昔の街道の名残の大福餅屋、自転車屋などが、櫻の大木の蔭や昔のついた藁屋根の下に店をひらいている。碌三の理髪店も昔から在るそういうこの土地らしい床屋の一つで、大福餅屋の店と同様、案外やつて行けている。昔は街道往来の馬車挽だの、野菜車をひいて東京へ近在ものを売りに出る若衆を相手にしていたこれらの店へ、この頃入つて来たのは、会社のマーク入りのカーキのジャムパアに、作業帽をかぶつた若い者たちで、歩道のどこでキヤツチ・ボールなんかしていたかと思うと、碌三の店をのぞいて、すいているとふらりと入つて来たりする。国防色の平べつたい袋をいつか鏡のところへ置き忘れて行つた若いのがあつた。財布でもなしと、碌三が白い上つぱりの裾で手を拭いて、そつとあけてみたら、それはピンポンのラケットであつた。五十八になつている碌三は、それを眺めながら、何か沁しみじみ々と今の若い者の生活やたのしみが自分たちの若衆時代とちがつて來ることを感じ、羨望とも、哀感ともつかない気持で暫くラケット

トをひつくりかえして見ていた。

景気に波がある。このことは、碌三の頭をはなれないことである。同じ土地整理組合に入つていても、所有地が裏だつたりいろいろの不便な条件にあることはやむを得ないとして、整理組合がそこいらまで道路を開鑿<sup>かいさく</sup>したりしないうちに、今のこの景気の波がすぎてしまいやしないかという不安は、絶えず碌三の念頭にある。碌三にとつて、猛之介もつたいらしく述べるような金儲けの哲学も、つまりは持地が三倍もの価でうれた当今の人間の腹からこそひとりでに出る嘜<sup>おくび</sup>のようなものだと、余りいい気持でもきけないわけである。

ふいと興醒めたような気になつて、碌三は鍊の音たかく、二三ヵ所仕上げのようなことをし、まあ、こんなとこかね、と、椅子をはなれて、バットの箱へ手をかけた。弟子の良太が白い布をとつてやると、猛之介は伸びをするように手脚を張りながら、洗面台の方へ行つた。

丹前のふところ手で、茹りたての頸筋のあたり、剃りたての顎のあたりに軽い風をうけながら猛之介は改正道路を、うちの方へ横切つた。荒物屋の日除けの鉄棒のところへ何か

下つていたので見ると、それは夜間英語教授という広告であつた。昼間働いて夜だけ勉強したい方は、僅の時間で英語の進歩する教授を御利用下さい。その荒物屋の家内は猛之介がよく知つてゐる。英語なんかやる人間はない筈だ。そうしてみれば、誰かがたのんで、こここの店先へ札を出して貰つてゐるのだろう。誰も、彼も、その向き向きで儲けようとしている、と猛之介は考えた。そして、それは極めて当然のことと思えた。儲けられるところをいくらかでも儲けないものは要するにうとい人間だし、そのたのしみがあつてこそ、人間は動いているのだ。

身代を大きくした猛之介の祖父さんの由兵衛という男は畠の由兵衛という綽名で呼ばれて生涯を終つた。自分の田の畠、畑の畔から野良道へ出るとき、由兵衛はいちいち草履の底をこそげて一かたまりの土でも自分の家の土を、どこのどいつでも歩く道へ持ち出さないようになつた。田の土、畑の土、それは金と汗のかたまりの土、往来の泥とはまるでちがう財産ということを由兵衛に子供のうちからきかされて育つた。ひどく擲<sup>なぐ</sup>られるのは、いつももうつかり藁草履の底をこそげずに、畑から道へとび出したときであつた。

時代が变つて、草履の裏につく土さえ外へ持ち出さなかつた心がけとは反対に、今は、ふつくりとした武藏野の黒い土の厚みを、二重に剥がして、土からの儲けを考えるように

なつて来ている。猛之介はこの知慧については自分に満足を感じている。土地を売買するときには面積を云つて厚みを云わないところに、猛之介の目がついて、今度昭和合金との間に話がはじまりかかると早速そこへ人夫を入れて、表面の土をならし一間ぐらいの深さにこそげとつて、その下のかたい褚つぽい土のところで、一町歩売りわたしの契約をした。猛之介は、こりや双方仕合わせでした、と云つた。あんたの方も重い機械を据えつけなさつて、じき土台がめりこむような畝土じやこまるだろうし。

こそげた土は、鮮人人夫が毎日働いて、敷地のずっと西端れの沢の近くの凹地へ運んだ。売れた土地はこのようにして地下げされ、売れない方の土地はこのようにして地上げされて、やがては買い手のつくようになされたのである。地下げしても、昭和合金の敷地は改正道路と全く水平だし、昔は一帯の小高い丘陵をなしていたその辺を開鑿して通してある道路の方から登つて来れば敷地の端れはそれでもなお、大人の身丈より高い位置に、地層の断面を見せてはいるのであつた。

マーブル荘という窓枠の桃色ペンキで塗られてあるアパートの新築工事を少しばらく時立つて見ていて又ぶらり、ぶらりとかえりながら、猛之介は余り浮かない気分である。けさの新聞に、凄い土地の暴騰として、事変前の十倍に上つたという地価のことが出ていた。それ

に比べれば、昭和合金へ売った地面は寧ろやす過ぎたようなものだ。整理組合がなまじつかるものだから、どうも個人として腕いっぱいの仕事がしにくい。役員の過半が、奥手へ土地をもつてゐる連中なのが、やはり暗黙に邪魔しているとも思える。遠慮して素通りさせるがものはねえ、といった心の底にはわが身の前を素通りしているものがあるという気持からだつたのに、碌三にまで勘ぐられたのは心外であつた。

西北の一角を切りくずしてしまえば、それで昭和合金へ売った土地の地下げは終るといふ日のことであつた。裏の苗畑につかう堆肥のところにいる猛之介を、女房のセキが表の方から、父さんどこけ？ とうるさく呼びながら、さがして來た。そういうとき猛之介は決して、ここだぞウと返事はしない。縞の前垂をかけて小さい丸髷に結つたセキが、ああなあんだ、そこけ、と近づいて来るのを猛之介はこちらに立つて見据えていたが、セキは又どういうものかきようはいつものように顔の見えたところから大声でがなつて来ず、すっかり猛之介のそばへよるまで黙つていて、しかも四辺を憚る氣配で囁いた。昭和合金さ売つた地面から、何か出るんだとよ。人よせが始まつてるとよ。——おら始めて今聞いたが。

顎をひく表情でそれをきいていた猛之介は、黙つたまま大きく両方の掌をうちあわせて塵を払うと、そのまま畠から出かけた。

行つてみると、注進どおり合金の庶務という男と、請負の現場監督と、人夫頭と、ほかにこれまで見たことのない洋服の若い男が三人、もう地下げの済んでいる地点にかたまつてゐる。紺の服を着たおとなしそうな若い男が、そこから拾つて来た枝の先で、地べたの上をさしながら何か説明している。猛之介の現れたときにはそれが殆ど終つて、庶務の男が、ふーん、そういうものだとは知らなかつた。こんなにかたまつてあるのは珍しいんですね。いや、きっと承知しますよ。飯島君、事務所の方からかかつてゆけば、こつちは秋ぐらいになるんだろう？　と、何かその若い男の肩をもつた調子で云つてゐるところであつた。飯島も、おだやかに、さア、秋まではどうかしらんが、夏いっぽいは大丈夫ですよ。それに大体こつち半分は庭になるんだししますからね。そう返事をしている。

猛之介は人々のその輪の間へ、や、と頭一つ下げてわり込んで行つた。そして、目をはつきりさせようと二つ三つ瞬きをして、そこの地べたを見下した。何もほかのところと変つたことはない。もし変つたところと云えば、枝を手にもつてゐる若い男の足許のところに、赭土を区切つて一間四方ぐらい畠土が黒くつまつた場所があるが、そんなところはこ

の地下げが始つたときからあつて、こう見わたしたところ、敷地全体にちらばつて二十や二十四五カ所、色ちがいのところはあるのだ。

用心ぶかく沈黙を守つている猛之介を合金の庶務が、その若い背広に紹介した。猛之介は、おとなしそうな若い男の顔へ、力のこもつた視線を凝じつと注ぎながら、何があるんですかな、と訊いた。豎穴が発見されたんです。この新しい黒土がつまつてゐるところですね。ここに、大昔、人間が棲んでいた豎穴があるんです。若い男は人のいい嬉しそうな笑顔で、實に珍しいんです、このように聚落をなしてゐるのは。と云うのであつた。ふーん。じや、あつちのもみんな、その穴ですね？ そうですとも。功労者は、この小関君です。というのを見れば、それは中学の帽子をかぶつた十六七の少年で、これも笑いひろげた口元が血色のいい頬っぺたを無邪気に盛り上げている。穴からは何か出ますかね。それは、発掘してみなければ分りませんが、土器は確に出るでしょう。淡白な答えて、猛之介に何となくその先の質問を出しかねさせた。猛之介のききたいところは、その土器というのは金目のものなのか、そうでないものか、という点なのである。

一団は、あちこちで掘りかえされている赭土の地肌から陽炎かげろうのたつ日向をゆっくり歩いて、改正通りの方へ出た。バスへのる迄注意していたが、洋服連の話は呑氣で、大森の

貝塚がどうのこうのというようなことばかりであった。

猛之介は、むずかしい顔つきで下唇をつき出しながら、独り又敷地の方へ戻つた。モツコをかついだ人夫の往来を漫然と眺めながら、落付かない気がした。猛之介は気を引くよう人に夫頭の吉永に向つて、ふん、物好きもあつたもんだね、いくらかになるんかい、土器とかを掘り出して、と云つてみた。研究だろう、大学の方の連中だつてえもの。これもあつさりした返事である。

じろりと吉永に一瞥を与えて、猛之介は敷地の外へ出た。どいつもこいつも、はぐらかしたような返事ばっかりする。吉永だつてわかるもんか、初めつからあすこにいたからには、うまい話なら一丁のつていない筈はない。本当のことなんか云うものか。若し一文にもならないようなことなら、あんなに皆うれしそうな光った眼をする筈はありっこないのだ。これが猛之介の信念である。

整理組合のガラス戸越しにのぞくと、役員の中では一番年配の岩本が、ぼつねんと一人で外を見ているところであつた。猛之介は、どうだね、いい話はないかね、と云いながら入つて行つた。岩本はすこし耳が遠いので、その挨拶には答えず、どうしたね、何か用かねど、新聞を片よせた。そこで猛之介は、昭和合金の敷地に豎穴が出たこと、そこから土

器が出るらしいことを話した。へーえ、あすこからそんなものが出来るのかね。じゃあ、よそにあるかしんねえな。ふむ。土器なんてもな、どうなんだね、金になる代物かね。さあ。——とにかく博物館にや多分そんなようなもんも納めてあつたな。

猛之介は、何んでもない世間話をして、そこを出た。博物館にも納つているとすれば、いづれ何か曰くはある物に相違ない。わるくひとにさわがれてしまうと工合がよくない。家へ戻るとセキが、声をひそめて、お父さん、何だつたね、とよつて来た。猛之介は例の見据えるような見かたで女房を顧みながら、何か研究で、穴を掘るんだとよ。樅の木の下の肥溜めに向つて放尿しながら答えた。

敷地のぐるりがトタン塀で囲われた。職人の掛小屋が出来た。真先に門の横の番人小屋が出来はじまつて、建築が着手される一方で竪穴の発掘も進行した。天気さえよければ朝早くから夕方まで、例のおとなしい顔の若い男がやつて来て、人夫を指図し、自分でも泥んことなつてかたい古い褚土の表面へ黒い布をはいだようなところを掘つてゐる。中学生もよく來た。あらまし人夫に黒土を掬い出させたあとは、この連中が軍手をはめた手に園芸用のシャベルをもつて、用心しい深い深さ一尺ぐらいで長方形をしたその穴を掘りおこ

して行くのである。こわれたりしては困るものが底に埋つてゐることは、若い者に似合わないその仕事ぶりの細心な根気よさでよく判る。

猛之介は、ぶらりと来かかつたふりをして一日に幾度か仕事場へ入りこんだ。そして穴の成りゆきを観察し、掘つてゐる連中の手元を監視した。骨董は天井知らずの価になつて來ている。この間も、支那の骨董を種に何百万円かの詐欺がばれたことが新聞に出ていた。土器と云えば、かわらけの類だろう。そんなことを云つたつて剣ぐらいは出るかもしねい。猛之介はそう思つて、見ていいる。

丁度、豎穴の一つに、<sup>かまど</sup>竈だというものが掘り出されたとき猛之介は居合わせて仔細に見届けた。穴の北側の壁の真中辺を掘つていた中学生が、オヤ、と叫んでシャベルの手を止め、井上さアーンと、もう一つの穴の中に蹲んでいる若い男を呼ばわつた。ちよつと！ 何かあるらしいですよ。焼けた粘土が出ましたよ。すると井上という男が駆けて来て、そう、竈かもしれない、変に声をのんだような調子で云うと、二人は物も云わず、シャベルと手とで土をとりのけ始めた。殆ど昼からじゅうかかつて二人が掘り出したのは粘土で厚くかためた焚口の、火床から外へ煙出しの通じた一つの原始の竈であつたが、井上は、そやつて猛之介が飽きもしないで見ていいるのを、面白がつて眺めていると思つたらしく、

いかにもよろこびを共にわかとうとする笑い顔で、こんなに完全な形で竈がのこっていることは珍しいんです、と額の汗をシャツの腕で気持よさそうに拭きながら云つた。ここに、ホラ、底のぬけた甕がさかさにしておいてあるでしょう。これは竈で炊事するとき甕の台につかつたものですね。こんな時代にも、やっぱり廃物利用をしたんですね、と笑つた。竈の前の踏みかためられた褚土のところを手で払うようにして調べて、井上は、ある、ある、ね、と中学生に示した。これが糲と藁の圧痕ですよ。この豊穴の時代にもう農作がされていたんですね。沢の方に水稻をつくっていたのかかもしれない。

尻っぱしよりになつて踏みこんでそこの地点をのぞいていた猛之介の心には、一種の失望とともに侮蔑に近い感情が湧いた。なーんのことだ。大昔の百姓の穴小屋をほじくりかえしているのか。そんなら、大したものは出つこない。今だつて東北のひどいところへ行けば、土間に藁をしていて寝ているという話だ。そんなところから、金めな代物なんぞ出ようもないことは知れきつてゐる。猛之介は穴から外へ出ながら、どれもあらかた同じようなものですかな、と云つた。剣だの何だのというものは、ここいらからは出ないかな。すると、井上はそういうものの出るのは、貴族の古墳ですね、と答えた。それに、西の方では鉄や銅をそろそろ使いはじめた時分に、関東はまだずつとおくれていて、やつとすこ

し鉄の端を刃物につかつたりしているところも、歴史上なかなか面白いですね。

しかし猛之介は、興ののらない表情で、翌日は豊穴のまわりへその姿を現わさなかつた。あの様子でみれば、研究というのは本当だつたのか。柱穴が幾つあるとか、溝がどうのと、物見を立てて写真をとつたりする、それだけのことと格別の魂胆もなかつたのか。そんなことを考え考え、煙管をかみながら猛之介が苗畠を見まわつたりしているとき、昭和合金の敷地へは、別の見物人があらわれた。噂をききつたえた附近の小学生たちがかたまつて、トタン塀の外から、何処から入れるんだい？　あつちだよ、あつちに門があるんだよ、などという声々を響かせながら入つて來た。いつも、大抵は男の子たちで、やや暫く黙つて井上たちのすることを眺めていてから、ぽつり、ぽつり、それ何だろ、というような質問をはじめる。

井上は、小学生の見物があらわれると親しい調子で、皆、勝手に掘つたりしちゃいけないよ、と先ず警告を与えてから、いろいろ説明してやつた。こんな皿は、こわれ易いんだからね。まだ上薬がかかってないだろ。大昔の皿はみんなこんなのさ。工業はまだすんていなかつた証拠だよ。

一旦見てしまうと堪能すると見えて、同じ子供がくりかえして来るということは稀であ

る。なかに一人、鞄をどこかへおいてから又やつて来て、井上たちの引上げる頃までいる少年が、井上の目をひいた。君、何年？ 五年。何ていうの？ 辰太郎。この辰太郎は無口で、だんだん掘る仕事の手つだいもするようになつた。かえりのバスの中で中学生がふつと井上に云つた。あの辰太郎つて子ね、何だか寂しそうな子ですね、僕そう感じるな。服装は大してわるくないし、お八ツ時分、井上が角の大福屋へ汁粉をのみにさそつても、余りついて来ない。

この辰太郎が猛之介の孫で、養子であつた生みの父親は、財産のことで猛之介と大衝突して、七八年前家を出てしまつていることを知つたのは、もう夏に入つてからであつた。

ちぢみ縮のシャツの背中を汗でじつとりにして、掘り初めの時分から見ると、すっかり日やけのした井上が、夏の日永を一刻も惜むようにして働いている。辰太郎が運動パンツに跣足はだしでわきにくつついて、シャベルを動かしている。その頃には、豎穴はもう二十米以上掘られて、その一部は又土をかぶせて、新築の鋳物工場や、仕上工場の土間になつていた。けれども、今にえらい先生がたが来るのだからと云つて、柔らかな土間の上へ白い石灰で豎穴の形が鮮やかに描かれていた。雨のすくない夏で、樹木の一本もない敷地の赭土の反射

は炎暑でもえるようである。井上も中学生も辰太郎も、余り暑氣の激しいときは、仕事をやめて沢よりの藪かげへ寝ころんで休んだり、雨天体操場のような天井の高い仕上場の土の上へ菰こもを敷いて横になつたりした。

辰太郎は何となし井上や中学生がすきになつてゐるのであつた。一粒種の後とりだから猛之介はこの孫を甘やかしている。婆さんや娘より、一段上のものという感じで見ていたが、辰太郎としては、一種の孤独の思いがいつも胸にあるのであつた。じいちゃんと自分との間、おばあさんと自分との間、そして母さんと自分との間、どつちを向いても、何となくもの足りない淋しいものがある。井上は中学生も辰太郎も同じ仲間のようにして、特に辰太郎には、竪穴に関連していろんな興味ある産業の進歩の歴史の話をきかしてくれた。辰太郎は、この丘の上へ続々立ちはじめた極めて近代的な工場と、その土の中にある古代の生活の遺跡とを、おどろきの目で見較べながら、そういう話をきいた。

夕方、辰太郎がかえると、その刻限には大抵夕顔の棚の下の床几にいる猛之介が、ふむ、きよは何が出た、ときくのであつた。竪穴から何が出たかという意味である。辰太郎は、切れもの破片が出たよ、とか、モモの核が出たよとか手短かに答える。自分から、きようは馬の歯が出た、と云つたこともある。猛之介がそれを訊く気持を辰太郎は知らない。

この夏は殆んど毎日合金の敷地で暮しているのに、叱りつけられないわけも知らない。猛之介は、孫が我知らずそこで自分の代理の役に立っていること、何か変ったものが出たとき、自分が知らずにいるようなことは無いめぐり合わせになつて来ているのに満足しているのであつた。

工場の建築の方が愈々<sup>いよいよ</sup>捲どつて来て、この一週間ばかりのうちには最後にのこつた二つの豊穴を調べ、発掘の仕事も一段落をつけなければならぬ時が迫つた。井上は益々せつせと掘つて、休むときは先の頃のように只寝ころがつてはいざ、仕上場の周囲にとりつけられた作業台の上に、これまで大きい木箱に入れておいた素焼の甕だの皿だの軽石だの、一つ一つこまかく何か書きこんだ紙を貼つたのを丁寧に並べる仕事にかかりつた。ボルトで締めた柱には幾通りもの図がかけられた。

一方ではそういう陳列をすすめながら、最後の小型の豊穴が掘られたのであるが、丁度人気ない手洗場の水道の蛇口へ口をもつて行つて水をのんでいた辰太郎は、辰ちゃん！おやいないのか、と云つてゐる井上の声をききつけた。ね、確にそうでしよう？ 火事があつたんだね。辰太郎は、走つてその穴のふちへ行つた。井上は、ガラスの円い蓋つきの

器を片手にもつていて、その穴の壁に沿つてついている焼灰の中から、こげたスキの一かたまりを、その器の中へそーっと入れている。辰太郎を見て、井上がこの竪穴ではどうも火事を出したらしいよ、と云つた。こんなに灰があるし、このスキなんかは多分屋根だつたのが、燃えおちた跡なんだろうね。

火事のあつた竪穴。ここで火事が出た。辰太郎は何だか気持が瞬間変になつたほど、ここに群れていた大昔の生活を自分の身に近く感じた。これまで、云わば標本のように古びて動かない遠方において感ぜられていた全体のこと、火事という活々と身近い出来ごとが、ここにもあつたときくと、俄にはつきりとした生活の息吹が通つて來た。どんなにみんなが騒いだだろう。叫んだり、駆けずりまわり、稻の束をかついで逃げたり、どんなにみんながびっくりしだだろう。その光景を思いやると、辰太郎は何だかひどく可愛そうになつた。火事だア、とどんな言葉で叫んだのだろう。そして、奇妙なことに、竪穴の面積が小さいせいか、みんなの体が今の大人よりは小さかつたように思えた。その小さい連中が、ここをあつちこつちへ駈けまわつたようで、いつか見た火事の記憶から、その太古の火事も、沢のむこうの櫟林くぬぎがうす蒼く輝いてかすんでいる風のない月夜に、ボーと赤く燃え上つたとしか思えないのであった。

感銘の生々しいつよさが、発掘の終つたこととも結びついて、辰太郎はその晩妙に悲しい心で眠つた。或る朝目が醒めたら、いかにも夏の末らしい雨降りであつた。幅のひろい雨がザアと降つてゐる。すぐ、豎穴はどうしたろうと、辰太郎は思つた。猛之介は、町会議員の補欠がどうこうということで朝飯をしまうと耳の遠い岩本と番傘をさして出て行つた。小やみになつたとき、辰太郎はゴム長で、開鑿道路のひどい泥濘の中を歩いて、昭和合金の仮通用門を入つて行つた。職人はペンキ屋が一人來てゐるきりであつた。塗りたてのペンキの匂いのなかを、仕上場の方へ行つて見ると、人つ子一人いない大天井の下に、大半が陳列されたままある。陳列の様子は、小学校の卒業式のときの陳列を思い出させた。どれも一生懸命、真面目に並べられてゐる。この陳列をそのえらい先生たちに見せてしまふと、井上は掘つた豎穴をみんな元のように埋めて、もうここへは来なくなつてしまふのである。

辰太郎は外へ出て、先ず火事を出した豎穴のところへ行つてみた。穴一面に浅く雨水がたまつてゐる。次、次、どれも長方形の池のようだ。辰太郎は、火事を出した豎穴のところへ来て立つて、永いことその長方形の浅い水の面に軽い雨粒が落ちてつくる波紋を眺め

ていた。やがて、何を思ったのかゴム長の爪先でまだそこに盛られている土の塊りの一つをそつと豎穴の空氣の中へ蹴こんだ。そして、辰太郎は水の底から何か音のきこえて来るのをでも待つような眼色をした。

## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第五巻」新日本出版社

1979（昭和54）年12月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

親本：「宮本百合子全集 第五巻」河出書房

1951（昭和26）年5月発行

初出：「改造」

1940（昭和15）年4月号

入力：柴田卓治

校正：原田頌子

2002年4月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 昔の火事

## 宮本百合子

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>